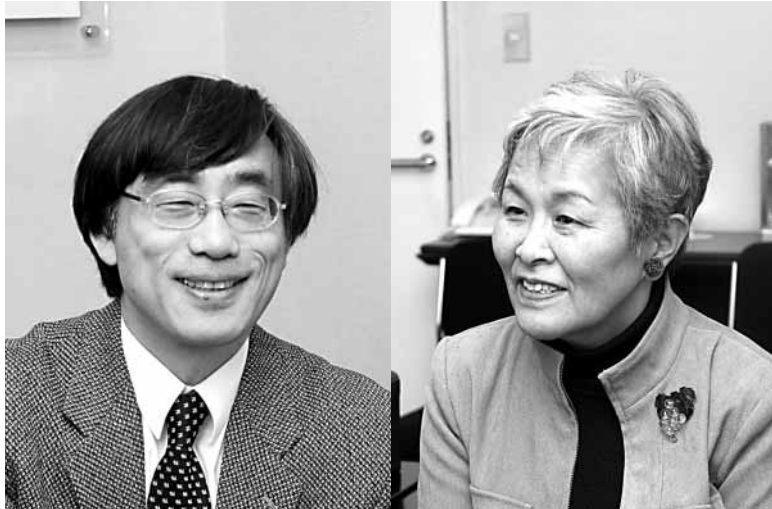


特 集

都 市



法政大学法学部教授

「市民セクターよこはま」  
副理事長

名和田 是彦 | 松本 和子

対談

都市における  
市民活動の展開

## 高度成長期の都市における地域づくり ——横浜ドリームハイツの事例から

**名和田** 本日のテーマである「都市」について、人口355万人を擁する日本最大の基礎自治体である横浜市、そしてそのなかの大規模高層住宅団地の1つであるドリームハイツ（横浜市戸塚区）に注目して、都市の普遍的な問題を浮き彫りにしていきたいと思います。

編集部から、都市をテーマに対談を企画しているといわれて、普通の学者同士の対談では面白くないと考えました。私自身横浜でフィールド調査をやっていますので、横浜の地域社会の現場で活動されている方を選んで、地域の過去・現在・未来を語っていただき、活動での苦労や喜びからおのずと出てくる言葉を理論的な枠組みにつなげ、それによって描かれる横浜の地域社会と都市のあり方がそのまま都市論としてもある程度の普遍性をもつように、対談を構成してみたい、と思いました。横浜市は、高度成長期に爆発的な人口膨張を遂げた都市問題の宝庫のような大都市であり、それを地域社会の側から眺めることによって、きっと都市論としても面白い対談になると考えたのです。そう考えると、長年おつきあいをいただいているドリームハイツの松本和子さんにおいては、適当な対談相手は考えられませんでした。今日は無理を聞いて来ていただき、ありがとうございます。松本さんは、活発で多彩な地域活動で知られているドリームハイツの住民の一人として、横浜市が膨張する過程で発生したさまざまな問題に取り組んでこられました。ドリームハイツが1972年から1974年にかけて竣工した頃に入居されたのですよね。

**松本** そうですね。入居してから31、2年になるのでしょうか。当時の横浜市は、高度成長期に爆発的な膨張を遂げ、インフラストラクチャーの整備が全く追いつかない状況でした。年間10万人もの転入があり、横浜市は学校の建設など最低限の課題に対応するだけで精一杯だったのでしょうか。そこで住民自身が自治会を中心にとまって道普請をするといった状態でした。

**名和田** このような都市膨張の受け皿であったドリームハイツの状況について、特に自主幼稚園「すぎのこ会」の発足の経緯を振り返っていただけますか。

**松本** 私はもともと関西に住んでいましたが、結婚を機に横浜に移ってきました。その当時はまだ、あたりは茅葺きの家が残る農村地帯で、ホテルも飛び交っていましたが、そこに2,300世帯の高層住宅ができて入居したわけです。ハイツの人口は1万人ぐらいでしたが、横浜や東京で生まれ育った人は少なく、実際に住んでみると、お店はない、保育所はない、お医者さんもないといった状況で、交通もとても不便でした。ちょっと雨が降ると川が氾濫してバスも運行できなくなるようなところでした。

こうした状況の中、自分たちの子どものためにと呼びかけてスタートさせたのが幼児教室「すぎのこ会」です。立派な設備などがなくても、友達と自然があればいいのではと考え、中古バスを空き地に置いて自主保育をはじめました。同じ頃に、千葉や埼玉や藤沢市などにある入居者が急激に増えた中～大規模団地でも、似たようなかたちの自主保育がはじまっていました。

**名和田** 同じような試みは、関東だけでなく、関西でも、さらにはドイツでも誕生していました。自主保育は、世界的な流れだったのですね。

**松本** 当時人口が急増していましたからね。生活をしていくためには足りないものがあることが次々と見えてきて、自主保育だけではなく、交通問題や物品の共同購入など、市民が自分たちで少しずつ解決策を模索していったのです。

**名和田** 自治会は、幼児教室の「すぎのこ会」ができていく過程で誕生したそうですね。

**松本** 団地の管理組合の設置は義務ですからすぐにできましたが、自治会に関しては交通問題や幼児問題など、生活上の課題に取り組む必要性を感じた人たちが自主的に集まって誕生しました。「すぎのこ会」にはじまり、次々といろいろな活動が生まれ、子育てや高齢化の問題に取り組む、現在では住みやすい地域になったと思っています。

**名和田** 熱心に地域活動に取り組む方々が、ドリ

ームハイツに大勢集まったのはなぜでしょうか。

**松本** よく尋ねられますが、みんな何もない土地を選んで同時期に入居してきましたから、市や誰か他の人に任せるのではなく、自分たちの地域を自分たちでつくろうとする連帯感が自然に芽生えたのだと思います。小さい子どもを持った親同士は保育の課題、通勤している人は交通の課題といった具合に、住民がそれぞれの生活上の課題についてまとまりやすく、声をかけ合いながら仲間が増えていきました。

**名和田** つまり、1970年代半ばに、同世代で、同じような問題意識を共感できる入居者たちが、さまざまな地方から集まってきたのがドリームハイツだったということですね。ドリームハイツの活動の特徴として「無理をしないで楽しく、できる人が、できることをやる」などとよく言われているようですが、それについてはいかがですか。

**松本** そうですね。このような活動を周りでは「ボランティア活動」と見る方が多いのですが、私は「すぎのこ会」を作ったときから、人のためのボランティア活動というよりむしろ、自分たちの生活に必要なものを作り出していく地域活動と認識しています。

一般的には人が集まって何か活動をするときは、グループ単位で活動しますから、活動にあたっては、誰もが同じように活動し、お金も同じだけ払うものという発想もあるでしょう。でも、それでは地域活動を継続的に担う組織は成立しにくいのでは、とも思いましたので、「すぎのこ会」を発足した時から、「できる人が、できるときに、できることをやろう」と言い続けています。この流れは、後から生まれたグループにも引き継がれているようです。

けれども、生活に必要なことをつくりだすわけですから、楽しいことばかりではありません。活動の中心になる人は、心身ともに大変な労力を費やしています。活動をしている人は、特別な人ではなく、普通の人で、活動を通じて自分の隠された能力を発見して輝きだすのです。だから活動が続いているのだと思います。

**名和田** それこそがドリームハイツの秘密なので

しょうね。

**松本** 一般に、「サロンがあったらいい」「食事サービスがあったらいい」「親子のたまり場がほしい」と願う人は多いと思いますが、誰かがやってくれるのを待っていて自分から積極的に動こうとしないことも多いでしょう。でも、そこから一歩踏み出すと、案外うまくいくのですね。ドリームハイツには、初めは夢のような話でもみんなでがんばっていけば実現できて、そこでお互いに成長し合って、自分たちでもやればできるという雰囲気浸透しているようです。

## 高齢化の進展と地域づくりのあらたな展開

**名和田** 私がドリームハイツに初めてお邪魔したのは1987年でした。その後、ドイツに1993年から1995年まで留学しましたが、帰国後、松本さんたちは長期ビジョンを構想していらっしやって、私も2週間に一度は通って勉強させていただきました。そのころから、ハイツの高齢化に対する認識が定着していったのでしょうか。

**松本** 1996年に自治会が入居者アンケートを実施した結果、入居者の高齢化が進むことが予想されました。ただ、現在は、予想したより少し若い世代が増えているように思われます。

**名和田** ハイツにはさまざまな活動がありますが、例えば「ドリームハイツ地域のつどい」は地域の問題を発見してみんなで考えていく、ゆるやかなまちづくりのネットワークというユニークな活動ですね。また、「ドリーム地域給食の会」は高齢化に対応して、高齢者の生活そのものを地域で支えるという発想をもって取り組まれており、やはりユニークです。そして、高齢者を心身ともにサポートする「いこいの家 夢みん (むーみん)」ですが、いろいろな意味で思い切ったことをされていると感じました。「すぎのこ会」で活躍されてきたメンバーが「夢みん」の受付係のシフト表に名を連ねていたことにも驚きました。ハイツの財産ともいえる人材が総力をあげて、高齢化に取り組まれていたというわけですね。

**松本** 「地域のつどい」は、それまで「すぎのこ

会」「たけのこ会」「ありんこ」「苗場保育園」などハイツの中にある子育てグループで開いていた勉強会を、もっと地域に広げようと1985年からはじめたものです。今では、民生委員さん、体育指導委員さん、青少年指導員さんなども加わり、15団体が地域でネットワークを組んで活動しています。大きな井戸端会議は年に1回です。それとは別に、2カ月に1回の小さな井戸端会議を開いたら、福祉のことを考えようといった動きが出てきて、1990年に「地域給食の会」が発足しました。というのも、やはり年をとると、体が弱ってくるのでまず食事作りが大変になりますが、食事をきちんととらないとさらに体も弱ってくることになりかねませんから。そう考えて、現在は、日曜と火曜の週2回配食しています。

1994年には、家事介護の助け合いの組織である「ドリームふれあいネットワーク」（現在は、「ふれあいドリーム」）が、さらに1996年に「夢みん」が生まれました。なぜ、「夢みん」が誕生したかということ、食事や家事介護だけではなく精神的ケアもできれば、それには本当に話したいときに話す相手がいれば集える場が必要なのではと考えたからです。最初はドリームハイツ内の1戸を借りていましたが、その後みんなでお金を出しあって購入しました。いつでも自由に出入りして、おしゃべりしたりお茶を飲んだりできる憩いの空間です。2000年にはNPO法人となり、また横浜市の介護予防型デイサービスの委託をうけています。「毎日いつでも行きたいときに行けることが大事」と考えていますので、「夢みん」をはじめ、その後発足させた「おやこの広場 ぼっぼの家」も月曜から金曜日まで毎日オープンしています。

「夢みん」の運営には、そのようなスペースが欲しいと思う人たちが積極的に参加してくれました。自分たちの希望をかなえるためにお金を出す人、労力を出す人、知恵を出す人、それぞれがそれぞれの形で貢献してくださっています。

**名和田** 「ぼっぼの家」の活動についても教えてくださいませんか。

**松本** 少子高齢化が進んでいるなか、今までの取り組みもあって、ドリームハイツは高齢者の方に

としては住みやすくなったのではと思っています。ただ、子どもがたくさんいた30年前とは違って、現在は子どもの数が少ないために、子どもの課題を共有する人も少なくなっています。そこに問題を感じて、改めて子どもに目を向けるようになりました。ドリームハイツの自主保育活動の1つに「ありんこ」というのがあり、17年間にわたって月2回親子の遊び場を提供していましたが、「もっといつでも集まれる場が欲しい」とか、「病院に出かける時に子どもを預かってほしい」といったお母さんたちの声が寄せられました。そこで、月曜から金曜の午前10時から午後4時までの間、親子のたまり場となる「ぼっぼの家」を2002年につくったのです。「ぼっぼの家」がある建物のなかには、障害児を支援するグループも入居しています。

## 長期ビジョンに基づいた地域づくりの重要性

**名和田** ところで、先ほども触れたように、2000年にドリームハイツの長期ビジョン答申が自治会と長期ビジョン特別委員会生活環境部会の名前で出されましたが、地域社会が長期ビジョンを持つ必要があると思われたきっかけはどのようなものでしたか。

**松本** 1993年に自治会で、住民アンケートを実施したところ、長期ビジョン策定の要望が多かったのです。その当時はまだ、高齢化についての実感はまだ弱かったと思いますが、住民としては将来かならず直面する問題にしっかり取り組んでほしかったのでしょう。そうはいっても、動き出すまでには時間がかかりました。そして、名和田先生を専門家としてお招きし、具体的な作業がはじまったわけです。

**名和田** つまり、長期ビジョン策定の背景には、高齢化社会を見据えて、計画的にもの考えていこうとする住民の意向があったのですかね。

**松本** そうです。

**名和田** 高齢化などの問題に対して、どの地域でも、住民が、自分たちが将来直面する問題を見据えて計画をたてるところまで発展させる地盤はあ

ると思います。しかし、ここまで住民の方が積極的に進めてきた例は少ないようですね。

## 新しいタイプの市民活動の誕生と コミュニティ行政の変化

**名和田** その後、松本さんは、「誰もが“自分らしく暮らせる”まちづくり」を願って自ら行動する個人や団体が連帯するという目的で結成された「市民セクターよこはま」の理事長になりましたが、きっかけはどのようなものだったのでしょうか。

**松本** 横浜市がドリームハイツの活動を評価してくれたこともあり、多くの市民活動団体とつながりをもっていました。そして、1998年に社会福祉協議会の呼びかけで「市民セクター構築のための研究会」に参加しました。その頃は、社会福祉の基礎構造改革の動き、介護保険制度の開始、NPO法の成立など、福祉の流れが大きく変わろうとする時期でした。その時までには、どちらかというと受身の立場が多かったのですが、やはり変わりつつあるその流れの中に身を投じたいと思い、勉強会に参加しました。1999年9月に「市民セクターよこはま」を立ち上げ、5年間代表を務めました。その頃から横浜市への政策提言や、行政との協働が少しずつはじまりました。

**名和田** 今の市民セクター設立の経緯のお話を聞いてみても、バブル経済がはじけた1990年代初め頃から、日本における自治体のコミュニティに対する態度が変わってきたという感を深くします。例えば神戸ではちょうど1990年に「ふれあいのまちづくり」事業がはじまり、条例もできました。この事業は、一見すると1980年代までのコミュニティセンターを管理・運営するタイプの住民組織を地元につくってもらうコミュニティ行政のあり方と似ています。しかし、実際のテーマは地域福祉です。コミュニティセンターを拠点にしながら、松本さんが強調されているような生活課題に根ざした地域活動を行うことが重要だと考えられるようになってきたと思います。

また、私も参加している横浜市港南区の市民活

動団体「まちづくりフォーラム港南」は、2001年度に、区の委託を受けて市民活動団体の調査を行いました。区の生涯学習支援センターに登録している団体を中心に調査をしたのですが、その結果をみると、生涯学習団体として登録されてはいるけれども、必ずしも自分を向上させることを主目的とする生涯学習活動だけではなく、実際はもっと生活課題に根ざした活動を目指している団体が4割もあり、非常にびっくりしました。しかもそれらの団体が活動拠点に対して抱いているニーズは、市民活動支援センターとでも言えるでしょうか、事務作業やミーティングが開ける場所が欲しいというニーズです。「地区センター」とか「コミュニティ・ハウス」といった横浜市における今までのコミュニティセンターに対するニーズとは全く違っていました。このような新しいタイプの生活に根ざした市民活動が生まれはじめたのが1990年代で、本格的に軌道に乗ったのが1990年代末ぐらいからでしょう。「市民セクターよこはま」の歩みも、このような時代の動きとピッタリ合っていますね。

**松本** 不思議ですよ。自分たちの動きが、全国、もしくは世界の動きと合っている。

**名和田** 地域社会に真摯に向き合っている方々の間でそのように時代にあった活動が、芽を吹いて成長し続けているのは当然ではないでしょうか。

## 地縁型の町内会・自治会と テーマ型の市民活動団体との関係

**名和田** さて、今度は横浜市全体の課題を直接テーマにしてお話ししたいと思います。2001年の横浜市民生活白書『よこはまの暮らしやすさ』によると、横浜市は高度成長期を通過し、いろいろな基盤整備も完了して暮らしやすい場所になったとされています。客観的にみてもその通りだと思います。ただ、同時にこの白書は暮らしやすい状態が今後も続くかどうかの問題提起もしていると思います。この問題を考えるにあたって、私は2つの大きなトピックがあると思います。

1つは、地縁系の自治会・町内会などの組織と

それぞれが自主的にテーマを設定して活動している市民活動団体が、どのような関係を築いていけるかという問題です。これは日本の都市の問題を考える上で、綿々と続いているとても大きなもので、最近では、特によく議論されています。

もう1つの問題は、最近「市民と行政の協働による新しい公共」とよく言われますが、そのありかたに関する課題です。日本の典型的な大都市の1つである横浜市において、市民はそれをどのように考えていったらいいのかという課題です。

まず、「地縁系」の組織と「テーマ型」の組織との関係についてはどうでしょうか。この問題もよく松本さんと議論してきましたが、あらためてまとまった形でお考えをお聞かせください。

**松本** 「テーマ型」に相当する私たちの活動の姿勢は、生活していく中で何か問題があるからそれに取り組んで解決していくというものです。ですから、問題が解決すれば継続して活動する必要はありませんし、住民全員が参加しなくてもいいと思っています。あることを問題と感じる人が参加し、その解決に向けて努力する。一方、「地縁系」の町内会・自治会は、行政の下部組織的な役割も担っています。特に横浜市は町内会・自治会への加入率が高く、行政の配布物が自治会・町内会を通して配布されたり、町内会・自治会の合意をとれば実質的に住民の合意を取ったことと同じになったりするところがあります。「テーマ型」のグループとはタイプが異なるといえるでしょう。とは言うものの、町内会・自治会は地域を代表する組織ですし、「同じ地域の住民同士なのだから」と考えています。ドリームハイツの長期ビジョンにしても食事サービスにしても、自分たちだけでできないこともなかったかもしれません。でも、私たちの活動に関して、地域全体の合意が得られ、有効に活用されてほしいと思いましたので、自治会などに協力をお願いしました。また、2004年に私たちの地域では恒常的な防災組織ができましたが、提案者として私も委員になっています。このように必要に応じて一緒に協力できる部分は協力していくといいと思います。町内会・自治会とは互いに自立性や自主性を尊重しながら認め合

うことが大切だと思います。

また、これからの自治会・町内会の役割は、お祭りなどでコミュニケーションをはかるだけではなく、防災をはじめとする安心・安全のまちづくり、高齢化に向けて安心できる生活基盤の形成になってくると思います。このようなことは一団体ではやはり達成が難しいので、地域全体で取り組まねばなりません。なかなか難しいとは思いますが、自治会・町内会長の役割は重要だと思います。

**名和田** 神戸市の真野地区で活躍されている宮西悠司先生は地域というものについて「わがとこ・よりしろ」ということをおっしゃっています。「よりどころ」のような意味ですね。この言葉のように、地域にしっかりと根を張って、私はこういう人間であるとみんなに承認されながら地域社会の中で生活を送っている人は、相対的に減っています。特に都市社会では、人はさまざまな部分集団に所属しており、地域に目を向けられない生活が、表面上は可能です。このような都市生活の特殊性ゆえに、いわゆるサイレント・マジョリティはお任せモードになってしまって、自治会長その他の自治会役員に過剰に責任や権限が集まってしまうことがあります。つまり「こういう問題が地域にあるけど、どうしようか」と呼びかけても、誰もこっちを向いてくれないために、次第に「自分がやらなきゃどうする」みたいになってしまうというわけです。住民が地域のことに責任を持つ仕組みが十分に整っていないなかで、自治会長が選出されていることが問題です。この問題は、都市社会の中には構造的に存在するものです。

他方で、1990年代以降行政が提供する公共サービスが減る傾向にあるので、地域自身がサービスを担わざるを得ない方向に変化しています。ですから地域社会の役割は増大している。では自治会・町内会でそのサービスを全部引き受けられるのかとなると、働き手の数が足りないでしょう。私が講演で自治会・町内会の方に「市民活動の方々と仲良くしてください」と話すのは、このような現実があると思うからです。

**松本** 名和田先生がおっしゃるように、合意を形

成するのは自治会・町内会単位であるべきでしょうね。

**名和田** そうですね。私は、人間は住む以上、必ずその周囲に地域的なまとまりをつくると考えています。これが地方自治体の原型だと思います。

確かに、ヨーロッパをみましても、膨脹した都市を管理するために小さな自治体が合併されて、どんどん大規模になりました。そうすると、身近な地域的なまとまりが失われてしまうわけです。日本の場合はさらに問題で、地方自治制度が成立した時から、もっとも規模が小さいコミュニティは自治体として認知されず、もう少し大きなまとまりを自治体として想定してきました。

つまり、ヨーロッパや日本に限らず、一般的な都市社会においては、最も身近な地域的なまとまりが、仕組みとして否定される傾向にあると思います。しかし、こうした傾向に対して、ドイツでは「都市内分権」という発想が出てきました。合併して大都市になってはいるものの、住民に身近な意思決定機関を民主的に組織するために、都市自治体の中を区域区分して、それぞれの区域に選挙制の住民代表機関と役所の支所を設置するというものです。一方、日本をはじめとするアジアでは、ここ100年の間、合併だけが進行していきました。住民に最も身近な地域的なまとまりはいわば置き去りにされたのです。しかし、それだけでは生活が成り立ちません。為政者が都市内分権制度を整備してくれないなら、住民の側から自主的に民間団体を組織し、身の回りの問題に当たっていかざるを得ません。それが自治会・町内会の起源だと私は考えています。ですから、民主主義の原則として、合意の形成は地域住民が全員参加できる可能性のある団体でなされるべきだと考えると、合意形成の場は自治会が中心になる必要があると考えられます。ところが、実態を見ると、なかなか難しい問題があることは周知の通りで、こうした具体的な実態を前にしてどのように考えたらいいかについて、松本さんとは昔から議論してきましたね。

先に触れましたような1990年以降生まれてきた生活防衛型のコミュニティ組織は、自治会を中心

としながらも多様なテーマ型の団体も参加している協議会組織をつくっています。地域をまとめて合意形成をしたり、公共サービスも組織したりする、新しいタイプの地域団体が発展している途上だだと思います。

**松本** 単位が大きくなりすぎてうまく機能しにくくなった部分が、小地域の取り組みに戻りつつあります。福祉活動を担う「地域ささえあい連絡会」などはその典型でしょう。これは中学校区単位ですが、もっと小さな問題に関しては小学校区単位でやるべきとの意見も出ています。小学校区ならば、お互いに顔が見えるし、地域で出会うことができるので、そこで合意を形成したり、何かを決めたりすればいいわけです。今そういう流れになっていますね。

**名和田** 松本さんとご一緒している横浜市の地域福祉計画策定委員会でも、随分と議論がありましたね。これは日本型の都市内分権といってもいいと思います。ただ、他の自治体と違って、横浜市はまだ中学校区を前提としているし、どういう仕組みをつくるかについてもまとまらない。とはいってもその横浜市で、ほかならぬ地域福祉計画の中で小さい単位を前提とする話が出てきたことは、とても時代を表していると思います。

## 市民団体と行政との関係

### ——協働による新しい公共の創出

**名和田** さて次に、もう一つの問題である「協働」や「新しい公共」についてお話をうかがいたいと思います。

**松本** 行政が「協働」と盛んに言い始めるようになったのも昨年ぐらいからでしょうか。私たちが「市民セクターよこはま」をつくった時にも、「行政・企業との連携・協働」を1つの柱としていました。横浜市で市民協働推進事業本部ができたのは2004年です。

2002年に「協働」の実験・検証の場として、市民活動共同オフィスがオープンし、市民活動団体に貸し出されてはいますが、実は行政も私たちNPOも市民も、本当の「協働」とは何かという

ことがわかっていないように感じています。ただ、市民活動共同オフィスができてから、「協働のあり方研究会」を発足し、随分勉強したり、議論したり、いろいろな事例を検証したりできたので、少しずつ意識が高まったと思います。

また、横浜市が策定した「協働推進の基本指針」に私たちの提案や意見が随分生かされましたので、そういう面では、「協働」についての勉強と同時に実践もはじまりつつあります。

最も理想的な「協働」だと思うのは、「市民セクターよこはま」と市の福祉局による「暮らしを支える生活術マトリックスモデル」の作成ですね。これは市が2004年度に発足させた「政策と創造と協働のための横浜会議」の公開プレゼンテーションで発表し、採択されたものです。行政もたくさんの人脈や知恵を出してくれ、一緒に港南区と西区を歩きまわっています。こうやって少しずつ協働の実践が積み上がっていくのかなあと実感します。

ただ、私が思うには、「協働」とはあくまでも手段です。何かを実現するために「協働」が必要だと思ったら「協働」すればいいわけで、他のことに関しては市民は市民、行政は行政で、それぞれ独自にできることをすればいいと思っています。なにしろ、「協働」にはすごい労力が要りますから……。

## 協働型社会の背景と今後の課題

**名和田** 「協働」ということがこれだけ叫ばれている背景には、行政だけでは必要な公共サービスを確保できないから、市民社会と連携していかねばならないということがあると思います。2003年11月に出された地方制度調査会の最終答申（「今後の地方自治制度のあり方に関する答申」）にも、「地域における住民サービスを担うのは行政のみではないということが重要な視点であり、住民や、重要なパートナーとしてのコミュニティ組織、NPOその他民間セクターとも協働し、相互に連携して新しい公共空間を形成していくことを目指すべきである。」と述べられています。

自治体レベルでも、1980年代までは、「参加」という言葉がよく使われていましたが、1990年代に自治基本条例の制定が盛んになり、そのなかで「参加と協働」が必ず並んで出てくるようになりました。その意味を調べてみると、「参加」とは自治体の意思形成に参加する権利を意味しているのに対し、「協働」とは、責任や負担を共に分かち合いながら公共サービスを共に提供すること、つまり、どちらかと言うと義務や責任を意味しています。この「協働」という言葉がキーワードになっていることが、現在の自治基本条例の一番大きな特徴です。この背景には、バブル崩壊以降、日本が長期不況に陥り、人々の所得は伸びないし、役所にも財政危機に陥ったという状況があります。この苦境をどうにか乗り切ろうとする意識の表れなのでしょう。現在は、例えば松本さんと一緒にいる横浜市の地域福祉計画策定委員会などでも、増税してもいいので行政サービスを充実させて福祉国家を目指しましょうとおっしゃる方はあまりいない。むしろ協働型ですすめていくのお考えが大部分です。

ヨーロッパ諸国は、多額の税金を払うかわりにほとんどの公共サービスに行政が責任を持つという福祉国家が国民的合意となってきました。しかし大きな財政危機に陥り、例えば私が研究しているドイツでも日本と同様な調子で「協働」が提唱されています。

日本では、福祉国家型の構想自体が国民の合意を得ていたとはいえませんが、やはり財政危機に陥り、協働による公共サービスの基盤確保を目指しはじめたというわけです。現在は、それに賭けるしか選択肢はないように思いますが、私自身は少し危惧する部分もあります。果たして現在の市民社会の中には公共的な力が、どの程度あるのでしょうか。市民の側では実践して自分たちの力を見極めようと一生懸命活動しています。学者はこれを実証的に議論するのが仕事です。先ほど申し上げた港南区の市民活動調査では、確かに市民社会の中には公共的な力があると考えられます。しかしそれでこれからの時代を乗り切るのに十分かどうかはまだわかりません。「協働」は1つの意



義深いチャレンジであり、市民社会を活性化させる可能性を秘めています。しかし、もしうまくいかなかった場合、かなり厳しい社会秩序の破綻がおきる可能性もあると危惧しています。

**松本** 横浜市では、市民が公共サービスを担ったり、新たな福祉サービスを開拓したり、この2、3年で市民の力のすごさが現れてきましたが、「協働」を進めていくには、まだ意識の変化が必要です。行政がライセンス制度を設けて市民活動にお墨付きを与えてもちあげつつ、実は財政難だから市民を活用するといった状態では、本当の意味での新しい社会にはならないでしょう。

私は「協働のあり方研究会」で、市民自治基本条例づくりまで達成したいと主張していましたが、結局、そこまでは至りませんでした。市民と行政のように互いに立場の違いがはっきりしている場合には、共通の目的を決めれば役割分担も容易ですが、市民同士ですとなかなか対等な協働関係をつくり作業を行うことが難しく、課題です。そのなかで、市民自身がもっと自治の力をつけていくことができれば、と思います。しかし、現在は、自主的・主体的に合意を形成しながら自分たちの地域をつくっていけるチャンスです。難しいけれどもこれほどいいチャンスはありません。

## これからの都市のあり方と地域づくり ——地域活動を担う人材の育成

**名和田** 最後に地域活動を担う人材育成についてお話したいことがあります。今、厳しい時代だからこそ、地域で必要とされるパーソナリティをもった人材を育成していかなければいけないと思います。大都市で暮らしていても、生活している人はヒューマンスケールで物事を見るので、小さな地域の仕組みが整備されることがまず重要ですが、なおかつ地域で信頼されるパーソナリティが求められます。「すぎのこ会」は、人材育成のカギを解くある1つの重要なケーススタディだと思います。

都市社会学者の故・越智昇先生が「コミュニティリーダーとは、ズケズケ自分から発言したり名

誉心に駆られたりする人ではなく、むしろ控えめだけど誰からも信頼される人ではないだろうか」とおっしゃっていました。そして、よくナサニエル・ホーソンの短編小説『人面の大岩』を例に出されました。アメリカの開拓時代、人間の顔に見える岩山と同じ顔をした人間が現れる時に幸せになると、村人たちが信じていた村がありました。ある日、その村の出身で、成功した人が戻ってきて、村人たちは、その人の財力や名声ゆえに「この人こそ人面の大岩の顔の持ち主だ」と言うけれども、いつの間にかその人は忘れ去られていってしまう。結局、最後に、慎ましかで村人の信頼を集めた主人公のアーネストこそがその顔の持ち主だと村人は気づくけれども、アーネスト本人は「そんなことはない」と言い、粛々とその村での生活を送り続ける、確かそういうあらすじです。

すこし長くなりましたが、研究者は冷静に客観的事実を観察するのが仕事です。が、しかし研究者がコミュニティを研究する動機をもつのは、そこに何らかのエモーショナルな実践的価値を見出しているからです。研究者として横浜の地域づくりに実践的に関わりながら、ややもすると他人のことなんか構っていられないと考える人たちが増えてくるであろう厳しい時代に、信頼のおけるパーソナリティが地域社会の中で見出されることを待望しています。具体的にどういいうパーソナリティかと聞かれても上手く説明できませんが、一人ひとりの人間が砂粒みたいに見えてしまう大都市のなかでも、そのなかの一人ひとりが「わがところ・よりしろ」を持って、地域に根ざしながら善意を広げていく社会になってほしいと期待しています。

**松本** 人材育成については、次の世代の方がしっかり育ってほしいと思っています。と同時に、私は次の世代に一体何を伝えていけばいいのか、と最近特に考えます。

私は「すぎのこ会」などを通じて地域に育てられてきました。きっかけや場さえあれば、お互いに刺激し合いながら、人間は死ぬまで育ち続けることができる、人間とはそういうものだと思っていますので、現代は暗い面や悲惨な状況もありま

すけれど、私は人間の可能性にとっても希望を持っています。ですから、そういう場をつくりたいと思っています。それが結局のところ、本当の人材育成になるのでしょうか。特別に優秀な人だけがその地域を担うわけではなく、誰もが誰かのために役に立つ可能性があるのです。

※ この対談は、2005年1月18日に行われたものです。

なわた・よしひこ 法政大学法学部教授。主な著書に『コミュニティの法理論』（創文社、1998）。コミュニティ論、公共哲学専攻。横浜市その他の地域社会をフィールドとして研究を進めるほか、横浜市児童福祉審議会委員、同市民活動推進委員会委員も務める。

まつもと・かずこ 特定非営利活動法人「市民セクターよこはま」副理事長。地域で30年以上子育て・障害児・障害者・高齢者支援の活動を続けている。（市民セクターよこはま：<http://www.shimin-sector.jp>）